今江祥智の本

第2巻

海の日曜日

理論社

今江祥智の本

第2巻

海の日曜日

理論社

今江祥智の本 第2巻

一九八〇年八月 初版

一九八〇年 八 月第 一 刷

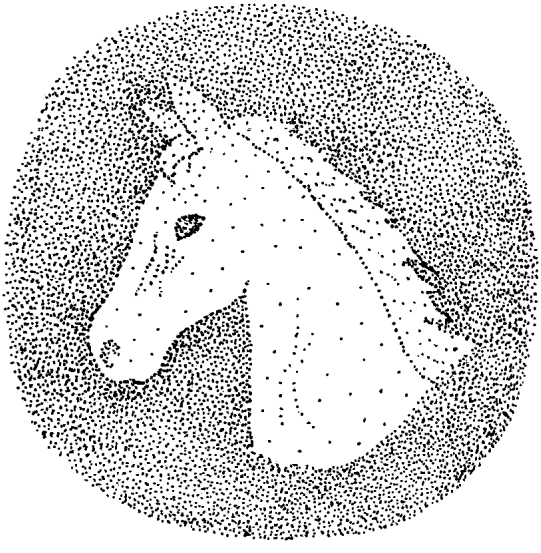
著者　今江祥智©

発行　株式会社理論社

東京都新宿区若松町一〇四

電話〇三（二〇〇三）五七九一〈代表〉

振替東京九—九五七三六



きみとぼくとそしてあいつ　7
はじめに　9
キングコングちゃん　10
コイのぼりがこわかった　18
ネズミくんのショック　26
パジャマ・ゲーム　34
馬と海と太陽と……　43
やっぱり、あいつ　52
おしまいに　62
さよなら子どもの時間　63
1　子どもの時間のはじまり　65
2　うしろの正面——おばあちゃんの話　71
3　羅漢さま——おじいちゃんの話　78
4　ふたりのバラ——かあさんの話　86
5　海のクリスマス——とうさんの話　92
6　赤んぼばんざい——ねえさんの話　98

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

7　くいしんぼうも、わるくない——にいさんの話　104
8　ふしぎな日曜日　110
9　子どもの時間のおしまい　123

海の日曜日　137

はじまり　139
1　木馬とチョウ　144
2　マリンスノー　162
3　四角い馬　181
4　サーカス　200
5　おまつり　211
6　うらぎり　227
7　海の日曜日　240
おしまいに　249

あとがき　253
解説　古田足日　255

編集委員　上野瞭
長新太
灰谷健次郎
装幀　平野甲賀
装画　長新太

制作　小宮山量平
発行　山村光司
編集担当　日比野茂樹

本文　加藤文明社
表紙　ダイニック
カバー　トラヤ印刷
製本　誠製本
用紙　十条製紙／日興紙業

今江祥智の本　第2巻

きみとぼくとそしてあいつ
さよなら子どもの時間
海の日曜日

きみとぼくとそしてあいつ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

はじめに

きみとぼく――というのはわかるけど、あいつって何かな？　と、おもうでしょう。あいつというのは、日本じゅうどこにでもいるきみとぼくのひとりひとりにとって、いちばん気にかかるもの……といったらいいのかな。

だから、あいつは、女の子のときもあるし、コイのぼりのときもあるし、自転車のときもあるし、白い馬のときもあるし、ネズミのときもあるし、先生のときもあるし、もしかしたらキングコングのときだってあるかもしれません。

そんな、いろんなあいつについてのお話を、ちょっと読んでみてくれませんか。

キングコングちゃん

1

クラスの男の子が集まると、話がとにかくキングコングのほうへいくのは、正太郎くんがいるからだった。

正太郎くんは一メートル六十一センチ、五十三キロだから、四年生にしては、特大なのである。一年生のときから、からだがでかくて強そうだったから、だれもあだ名をつけようとしなかった。正太郎くんには、それが少しものたりなかった。じぶんにふさわしい、りっぱなあだ名が、ほんとはほしかったのである。

それで、あの映画「キングコング」のことが、新聞などにのりはじめ、話のたねになりはじめると、じぶんから名のりでた。おれはコングだぞ……というわけである。そういわれてみれば、正太郎くんにぴったりのあだ名だった。

そいつは、三日もしないうちに、四年生じゅうにひろまっていった。一週間のうちには、学校じゅうにひろまっていた。五年生六年生の男の子のなかには、女の子たちのてまえ、ふん、なにがコングだ……と、ぼやくものもいた。しかし、ほんとにけんかしたら、正太郎くんにかなうものはいなかったから、大きなこえではいわなか

った。

*

正太郎くんは、あだ名のてまえ、映画がきたら、まっさきに見につれていってもらった。いっしょにいったかあさんのほうが、キングコングをこわがった。正太郎くんは、キングコングが、おもっていたとおりに、強かったのでうれしかった。けれど、女の人にやさしすぎるのには、ちょっとこまった。あだ名どおりにするのなら、じぶんも女の人に――いや、女の子にやさしくしなければならない。

（ぼくは、ほんとに女の子にやさしかったか？）

正太郎コングは、映画館のくらやみのなかで、これまでのことをおもいだしてみた。一年生のときから、なんどか、女の子とはでにやりあったことはあった。しかし、なかせたことはなかった。かなきりごえをあげさせたことはあった。

（でも、キングコングだって、あの女の人に、かなきりごえをあげさせたぞ……）

それは、女の人がコングのやさしさを知らなかったためだった。

（それなら、ぼくも、これからおこないをつつしめば――）

正太郎コングは、そんなことばで考えるだけでも、わきの下がぞくぞくしたが、がまんしてつづけた。

（これまで、ちょっぴりいじめた子も、ぼくのやさしさに気がつくさ……）

そこまで考えると、気がらくになった。スクリーンでは、キングコングが、ヘリコプターのきかんじゅうにうたれていた。コングは、女の人を守るために、じぶんがうたれていた。それから、高い高いビルの上から落ちて――死んだ。死ぬすぐまえまで、女の人のことをやさしい目で見ていた。そのようすに、正太郎コングは、むねをつまらせた。けれど、かあさんのまえでなみだをこぼすわけにはいかなかった。もう一回見たかったのに、か

あさんはこわがって、かえりたがった。おしかったが、いっしょにかえるしかなかった。
あくる日から、正太郎コングは、だれかれなしにキングコングの話をした。コングがほんとは女の人にやさしいというと、みんな首をかしげた。
—なら、見てこいよ。ほんとだってば……。
キングコングの映画を見にいくことが、はやりはじめた。見てきたものは、とくいになって話した。そんなわけで、クラスの男の子が集まると、話はとにかくキングコングのほうへいくことになった。そして、いつもまん中にいるのは正太郎コングだった。
そのうち、女の子たちも、話のなかまにはいってきた。正太郎コングのにらみがきいているので、男の子たちのあいそがよかったからだ。そして正太郎くんは、まるでじぶんのことが話されているみたいに、うれしそうにみんなの話にききいるのだった。みんなは、むろん、あの女の人のことも話した。キングコングがえらんだ女。それなら正太郎コングは、だれをえらぶのか——そんな目になって正太郎くんのほうを見ながら、話すのだった。そのときだけ、正太郎コングは、ちょっとまぶしそうな顔になった。よくきいていなかったふりをした。正太郎くんは、とくになかのよい（キングコングみたいに、その人のためになら死んでもよいといった）女の子はいなかった。しかし（死ぬのはこまるが）できればなかよしになりたい女の子はいた。ただし、あのキングコングのように、その子をうばいとる勇気がなかったのだ……。

*

そうしたなかで、たったふたり、話のなかまにはいってこない子がいた。
静男くんと、あずさちゃんだった。
静男くんは、名のとおり、おとなしくこがらな男の子で、あずさちゃんは、目のすんだ、わらうとほんとにや

さしい顔になるやせっぽちの女の子だった。そしてそのあずさちゃんこそ、正太郎コングがこっそりとあこがれていた女の子だったのだ。

正太郎くんは、力ずくでもあずさちゃんを話のなかまにひきいれたかった。しかし、コングなら女の人にやさしくしなければならなかった。正太郎コングは、教室のすみっこで、ひとりであやとりしているあずさちゃんをちらちら見ながら、心のなかで舌うちした。

静男くんは、みんなのなかまにはいらないから、ひとりでに、そんなあずさちゃんのそばにいくことになった。ふたりはいつのまにか、なかよくあやとりをして遊ぶようになった。

正太郎コングは、くやしかった。しかし、コングは女の人にやさしいのだ。うでずくはつつしまなければならないと、じぶんにいいきかせてがまんした。

2

静男くんはあずさちゃんに、

—きみとぼく、いつもふたりぼっちだ……。

と、はにかむようにいうようになった。

あずさちゃんは、やさしい笑顔になってうなずいた。そうしていることが、ふたりだけのひみつみたいでうれしく、静男くんもにこにこした。そんなふたりのとこへ、信ちゃんがやってきた。すごむように、ふといこえでいった。

—ふたりとも、キングコングの映画、まだ見てないのか。

ふたりとも、ん、とうなずいた。信ちゃんは、静男くんにむきなおった。
—どうしてだい、静男。
—キングコングなら、ぼくんちで飼ってるもん。
信ちゃんは、ぽかんとして、静男くんの顔を見つめ、それから、くくくくとわらいだした。くくくくが、あはあはあははにかわり、おしまいには、おなかをかかえてわらいつづけ、なみだをこぼした。そして、なにごとかとふしぎがるみんなに、あえぎながら説明した。
—静男んとこ、キングコング、飼ってるんだって。
みんなも、ぽかんとなり、それから、信ちゃんとおなじように大わらいしはじめた。
—だって、ほんとだったら。
静男くんが力をこめていったのに、だれもきいてなんかいなかった。しかし、あずさちゃんが、よくとおるこえで、
—きっとほんとよ。わたし信じるもん。
といったのは、きこえたらしい。信ちゃんが、むきになっていいかえした。
—ほんとに見なきゃ、わからないさ。
—見てくるわ。ちゃんと見てくるわ。
—だめだめ、キングコングをつれてこいっていわないけど、ふたりだけで、ほんとぶってもだめ。だれかいっしょに見てこないとさ。
—いいよ。おいでよ。
静男くんがいって、まっすぐに正太郎くんを指さした。正太郎くん、いっしょにきてよ……。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com